

北陸大学図書館報

NO.49



◆◆読書について

漫然と楽しむも有りだが、キーワードをメモリながら読む効能◆◆

図書館長・薬学部教授

鍛治 聡

最近の傾向は、相も変わらず中国歴史物です。宮城谷昌光さんの古代中国の偉人にスポットを当てたシリーズものをちまちま読んでいます。別に歴史を覚えようと言うわけではありません。まあ、いってみれば疑似体験ですね。ただ、漫然と読んでいる・・・いや、目を彷徨わせていると前後関係、話が展開している地域、何よりも人物名が分からなくなってきました。加えて、はて？この人物名は何と読むのだったかと数ページから酷いときは十数ページをさかのぼってルビを探す羽目になるのはしょっちゅうです。防ぐにはどうすればよいか。

読むのを止めると手間は省けるが、敗退ですよ。読むのを続けるには、メモを取る。主人公なり脇役の視点でメモをとる。疑似体験・いろいろうんちくというか自分にはないものを知ることになる。いってみれば、スポットライトを浴びる人たちですからね、当然といえば当然。登場人物は時代の寵児、政権幹部、総理相当クラスですもの。そういえば、安倍晋三総理大臣殿ありがとうございました。そして、お疲れ様でございました。少なくともあなたは日本という国に顔があることを示してくれました。長くやれば良いものではないと当然思いますが、メルケル首相の一言が多くの国の思いを代弁していた「ころころ首相が変わる日本＝顔が見えない国」、「外交べた」を打開してくれたと思います。で、話を元に戻すと自分がおよばなくて当たり前で、逆に言うなら学ぶべきことばかり。ただし、実行できないことばかりだけど。だけど、この自分とのギャップに嘆いてはなりません。疑似体験を楽しみましょう。そのためには、くどいようですがメモが大事です。

メモの効能は、流れをつかむ、状況の把握、つながりの確認等々。まあ、キーワード作成ですね。ちなみに、データベースを活かすにもツボを押さえていることというか、キーワードが重要。知識、経験があるとさらに利便性が増します。ついぞこの前もこいつは何だろうという採取物。何だろうと関心がありつつも、さっぱり見当が付かず調べようがない。うっちゃっておいたところ、知っている人は知っている。勿論、そのものずばりではなく調べ方・たどり方を知っている。こちらの悩みは瞬殺。知識は大事だなあ。

まあ、そもそも関連づけは何も歴史物の読書には限らない。そもそも6年次生が苦勞している受験対策もね。読書は疑似体験のみならず、キーワードの抜き出し、そしてそれからの展開させる力の育成にもつながるはず。データベースの活用にも関連するキーワードのストックが効率と関連し、アドバンテージとなる。自ら学ぶ上でも重要なツールとなります。その願いも込めて、学生の皆さんには図書館に所蔵されている本を活用してほしいと思います。読書を楽しみましょう。

◆◆ 図書館で時間つぶしはいかが？ ◆◆

薬学部教授

手塚 康弘

私の本との付き合いは、小学校入学前に近所の貸本屋で借りて読んだ手塚治虫の漫画（おそらく『ビッグX』）に始まると思う。それ以降、主に月刊誌や単行本の漫画を片端から借りて読んでいったおぼろげな記憶がある。その後、小学生になると家にあった世界文学全集(?)をパラパラとめくり、目についた『モルグ街の殺人』から推理小説にはまり、『火星人類来(?)』でSFにはまった記憶がある。この様に、図書館ではないが、たまたま目についた本から読書にはまっていった。小学校中学年以降になると、たまたま学校の図書室で見つけた『怪人二十面相』から江戸川乱歩の少年探偵団に、『奇巖城』から怪盗ルパンにはまり、それらがきっかけとなって小中高と推理小説やSFを読み漁っていた。それらのほとんどは本屋で購入していたと思うが、一部は学校の図書室で借りて読んでいたと思う。また、その当時の本屋は結構立ち読みをさせてもらえたので、短編小説などは立ち読みで済ませていたものもかなりある事を考えると、本屋を図書館として利用していたとも言える。高校になっても、それは変わらなかったが、国語の先生の言葉につられて「第三の新人」と呼ばれた人たちの、どちらかというと砕けた（アダルトの匂いのする）作品を入り口として文学作品にも手を出すようになった。ここまでは図書館は本を借りる場所として利用していたが、流石に受験生となると図書館で勉強というものをやるようになった。もっとも、図書館で勉強するというよりは、友達との待ち合わせの場所に利用していたような気がするが。

このように私の図書館の利用は決して「読書」という言葉からイメージされるような上等なものではなかったし、「図書館」も読書目的以外の使い方が多かったようにも思う。この経験から皆さんにお勧めしたいのは、少し時間があったら図書館に行って、手近な本をパラパラとめくってみる、あるいはタイトルを眺めてみる、という事である。その中で、面白そうだと思う言葉（タイトル）が目に入れば、読むか読まないかは別として、とりあえず借りてみてはいかがだろうか。そうする事で予想外の本と出会い、行き詰まっていた悩みを解決する糸口が見つかるかもしれませんよ。

◆◆ 本が好きです。 ◆◆

薬学部助教

毎田 千恵子

私は毎日、本を読みます。子供の頃から寝る前は本を読むのが習慣になっています。大人になって独り暮らしを始めてからは、特に本を読む時間が増えました。本を読んでいる間は、仕事のことや他のことを忘れて、時間を過ごせます。大学時代は、勉強しなければならない時だというのに、面白い本を読み始めたら止まらなくなり徹夜で読んでしまったこともありました。今も、夜中にお酒を飲みながら本を読み、寝る前は布団の中で区切りまで読んで寝る（または読みながら寝てしまう）ということを、ほぼ毎日繰り返しています。

幼稚園の絵本コーナーに始まり、学校の図書館や公立の図書館で、読みたい本を探す時間は、とても楽しみでした。本屋さんに行くのも楽しみだったのですが、好きな本を好きなだけ買えるわけではありません。図書館なら一回の貸し出し冊数に制限はありますが、この棚の本を順番に読もうとか、好きな作家さんの本をシリーズ全て読破するなど、様々な楽しみ方ができました。

大学生になると、図書館は調べ物をしたり、自分の勉強スペースとして利用したりする人が多いと思います。図書館で勉強していると、周りが皆勉強しているので、自分もやらなくてはという気分になるのが良いですね。大学の勉強に必要な本も、買った方がいいものももちろんありますが、全ての書籍を購入する必要はなく、図書館を上手に利用してもらえればと思います。

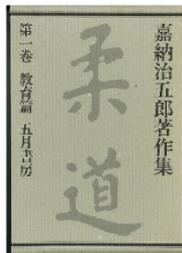
社会人になってからは、図書館に本を借りに行くのは楽しみだけれど、返しに行くのが面倒で、買った方が時間制限もなく楽だということに気付いてしまい、仕事以外での図書館の利用は減りました。図書館委員になったことをきっかけに、私もまた図書館を楽しみに使うことを始めようかと思っています。学生の皆さんも「何かいい本ないかな」と図書館の書棚を眺めてみる、集中できる環境を求めて図書館のスペースを利用するなど、図書館との良い関係を築いてほしいと思います。

◆◆ 読書感想文（第20回）・書評（第2回）コンクール

—公平な審査と審判— ◆◆

経済経営学部教授

南谷 直利



今回も筆者は、読書感想文（第20回）・書評（第2回）コンクールの審査委員（読書・書評競技の審判員）を務めている。その責任もあり学内広報と学生周知を以下のように行っている。Ⅰ.南谷ゼミ生（ゼミナールⅡ履修者26名）全員が出品する。Ⅱ.manabaシステムを利用して、推薦図書アンケート調査を①スポーツ（薬学部履修者61名に7回）、②スポーツⅠ（国際コミュニケーション学部履修者127名に14回）、③南谷ゼミナールⅡ（経済経営学部履修者26名に14回）、④スポーツ実習Ⅳ（経済経営学部履修者33名に14回）⑤アスリートサポート演習（経済経営学部履修者53名に14回）、⑥運動動作学（経済経営学部履修者108名に14回）においてそれぞれ実施した。

教育学における修学活動の動機には、1. 内発的動機付け（修学の喜びを感じる、修学が好きで、知りたいと思う感情等の要因）、2. 外発的動機付け（特待生奨学金の給付、AOポイントの獲得、個人表彰等の要因）が存在する。理論上では、本コンクール（全学行事、学生ファーストの理念）においても内発的と外発的の両要因の動機付けが不可欠であり、手厚く準備していないと教育学博士や修士の立場の人間であれば、臨機応変に動機付けを修正する。ただ実際に「教育」は肉眼では見えないものであり、その成果の検証も何年も先になって可能となる。従って真の教育者は「教育」の言葉をあまり使用せず、「指導する」や「手ほどき」等の目に見える現象表現を用いるように思う。筆者自身も未熟であり、「教育」を連呼してはいけない。

筆者は、順天堂大学卒、金沢大学大学院修了、マカオ政庁治安部隊講師（旧ポルトガル領、柔道：交通警察、水上警察、消防）、マカオ柔道ナショナルチームコーチ（バルセロナ世界選手権大会・ホノルル環太平洋選手権大会・大阪アジア選手権大会・クアラルンプールマレーシア国際大会・香港南華大会・広東省澳門香港対抗大会・福岡国際女子選手権大会等をコーチで参加）の後に帰国し、学生と共に本学柔道同好会（2年間）、柔道部（27年目）を創設した。当時県内には、順大柔道部の大先輩である山崎外美男先生（金沢泉丘高卒・順大柔道部OB、元金沢二水高・元津幡高教諭）がいらして、市内曉町宅へご挨拶にうかがった。柔道競技の審判法は時代と共に変容していて、読書感想文・書評コンクール競技の審判法（審査法）も正しく順応すべきであろう。柔道競技の審判員も本コンクール（第20回の開催記念行事）の審査委員も先輩や先人の手法を参考にして、修学環境（新型コロナウイルス感染症禍）での学生に対する不利益がないように調整したい。

一冊の本を10回以上読むことや、作家の全集を読破すること等、読み込んできた学生の作品は、高評価になると感じる。本コンクールにおいて、気持ち良く「一本、それまで」と宣言できる位に健全な判定（審査）を行いたいと思っている。



◆◆ アウトプット読書術 ◆◆

国際コミュニケーション学部講師

大東 万里絵



読書には娯楽、自己啓発、情報収集など様々な目的があります。「授業の課題レポートを書かなければならないから」、「読書感想文を書くので本を読まなければいけないから」という理由で読書をするのでは、ストレスがたまり、モチベーションも下がってしまいますよね。せっかく読書をするのであれば、楽しく、そして身になる読書を心がけたいものです。

『読んだら忘れない読書術』（樺沢紫苑、サンマーク出版、2015）によると、読んだことを「アウトプット」することによって、記憶に残り、自己成長につながると述べています。過去にたくさんの良い本を読んだけど、時間が経つと内容を忘れてしまったということがよくあります。本の内容を忘れてしまうというのは、インプット（読む）だけで終わってしまうからだそうです。例えば、本を読みながらメモをとる、本の内容を人に話す、本の感想や書評を書くなどといったアウトプットを、1週間のうち3回行うことによって、記憶が圧倒的に定着しやすくなるそうです。また楽しみながらワクワク読むことで、記憶を強化する脳内物質ドーパミンが出て、記憶に残りやすいそうです。

このように楽しく本を読み、さらにアウトプットを実践することによって、良い効果が期待されます。皆さんも学生時代に様々な本を読み、人生が変わるような良い書に出会ってほしいと思います。そして良い本に出会ったら、この「アウトプット読書術」を活用してみたいかがでしょうか。

◆◆ 読んでおくべき本とは？ ◆◆

国際コミュニケーション学部教授

林 洋一



今、出版文化が危機的な状況にあります。町の本屋さんばかりか、全国展開している大規模な書店も次々に閉店したり、業態を変えていかざるを得ない状況にあるのです。出版業界に詳しい友人から聞いた話ですが、フリーの編集者の年収は「10年前の半分」になっているそうです。確かに電子出版は盛んになっていますが、その印税率は非常に低い、とのことでした。

時代は、ペーパーレスに向かっています。ですから、「紙」に依存した出版文化が消えても仕方がないのではないかと、新聞もいずれ完全に電子化されるだろうし、と考えている人は多いでしょう。それは一面の事実ですが、紙の本には電子ブックに代えがたいよさがあります。もちろん、電子化された本にも、いつでも持ち歩けるとか保管スペースがいらないなどの利点がありますから、両者が上手く共存できるとよいな、と思う今日この頃です。そして何よりも、出版文化の灯を消してはいけないと考えています。

文化としての出版という観点からみると、社会のあり方や歴史認識に大きな影響を与えうる本は、高く評価できると思います。それらは「読んでおくべき本」にふさわしいものでしょう。それでは、「読んでおくべき本」は何でしょうか。これは難しい問いで、人によって、またどのような読者を想定するのかによって、意見は大きく異なるでしょう。もし、現在の日本で暮らしている若い人に向けて、ということでしたら、私は躊躇なく『1945年のクリスマス』（柏書房、1995）を挙げたいと思います。

著者のベアテ・シロタ・ゴードン（1923-2012）は、ロシアの著名なピアニストの娘として生まれ、5歳から15歳まで戦前の日本で育ちました。そして、アメリカ留学中に太平洋戦争が起きたため日本に帰れなくなり、戦後、GHQの一員として両親のいる日本に戻りました。彼女は、母語であるロシア語の他にドイツ語、フランス語、スペイン語、英語、そして日本語ができた才媛ですが、この本のサブタイトルにあるように『日本国憲法に「男女平等」を書いた女性』なのです。現在、私たちが「当たり前のこと」として考えている「男女平等」も、もし当時22歳の彼女がいなければ、憲法に明記されてい

なかったかもしれないのです。

私がそんな彼女のことを知ったのは、以前勤めていた東京のカトリック系女子大学での「講演会」でお話しを伺った時でした。小柄で上品な老婦人で、完璧な日本語を話す方、というのがその時の印象でした。しかし、後でこの本を読んでみると、日本国憲法が作られた裏側に何があったのか、戦勝国アメリカと敗戦国日本との「憲法」を巡る熾烈な駆け引きがどのようなものであったか、ということが詳細に記されていたのです。彼女の経歴や業績は Wikipedia に紹介されていますから、興味のある人はそちらを見て下さい。

現在は新型コロナウイルス感染症の影響でやや下火になっていますが、近年、憲法改正を巡る論議が高まっています。ただ、それに賛成するにしろ反対するにしろ、議論をする前に、まずこの本を読むことをお勧めしたいと思います。日本のあり方を示す憲法がどのようにしてできたのか、その正確な経緯と歴史的背景を知らずして適切な評価はできないからです。このような意味から、「読んでおくべき本」として取り上げました。

最後に、著者まえがきの最後の部分を引用しておきます。

「私は今でも、高い理想をかかげた日本国憲法はすばらしいと思っています。

私は、この本を読んでくださった女性が自立し、仕事を持ち、女性の権利の獲得のために闘い続ける勇気を持っていただければ、と願っています。また、この本をお読みになる男性は、そういう女性を支えて下さいますようお願いいたします。」

◆◆ 「人間らしくヘンテコでいい」 ◆◆

医療保健学部准教授

關谷 暁子



はじめまして、關谷暁子（せきやあきこ）と申します。今年度、医療保健学部に着任しました。図書館報への初めての寄稿となる今回は、学生の皆さんにぜひおすすめしたい、私の大好きな一冊『人間らしくヘンテコでいい』（集英社、2014）を紹介したいと思います。

「我々はどこから来たのか、我々は何者なのか、我々はどこへ行くのか」

そう自問しながら、著者の鎌田實さんは、原生人類のグレートジャーニーの軌跡を、その足で辿ります。人類発祥の地アフリカから、世界へ広がる道のりの中で、人類は道具を使い、言葉を発展させていきました。弱いから群れをつくり、家族やむらができました。コミュニケーションをとる中で、複雑な思考、情動や概念的思考が育ちました。死の概念ができると、死への畏れから、宗教が生まれました。そして長い長い旅の末、ホモ・サピエンスの心は、殺戮もすれば、死者に花を手向けたりもする、とてもヘンテコなものになりました。

鎌田さんは、自らが辿った生命 36 億年の旅に私たちを誘（いざな）いながら、「人間らしさって何だろう、人が幸福に生きるのに本当に必要なものって何だろう」と問いかけます。医師として出会った人たちや、ともに旅をした人たち、旅先で出会った様々な人たちの生き様やことばを示し、人間の強さ、優しさ、いのちの素晴らしさを伝えてくれます。

自分のいのちも、他のすべての生命体のいのちも、この宇宙の中で循環しています。死んだいのちは原子となって、新たに生まれるいのちに再利用されます。ニーチェの「永劫回帰」と宇宙中の原子の循環、ホモ・サピエンスの旅の軌跡とミトコンドリア DNA の遺伝子型や、ヒト白血病ウイルスの分布の一致、アインシュタインとフロイトの往復書簡の話など、文理を実に豊かに行き来した視点は、「哲学的思考をする医師」である鎌田さんならではのものかもしれません。幅広い知識と深い思索から生まれることばだから、読者は引き込まれるのでしょう。鎌田さんの紡ぐ、とても素朴でやさしいことばに、どこかほっこりした気持ちにもなります。

人類が地球上に繁栄したのは、集団の中の、ちょっとヘンテコで好奇心旺盛なグループが旅をはじめたからだと言います。そうやって、こんな東の果てまでやってきた日本人の祖先は、相当ヘンテコだったに違いないと。まだ誰もやっていないことを、「なんか良さそうだから」とやってみることは、周囲からはヘンテコに映るかもしれませんが、でもそれは、私たちの社会を前に進めるための「旅」なのかもしれません。

「ひとにうまれて、よかったな」そう思える一冊ですよ。図書館にありますので、ぜひ一度目を通してみてくださいね。

◆◆ 読書効果 ◆◆

医療保健学部准教授

濱田 敏彦

読書効果についてネットで調べると、ストレス解消、脳の活性化、語彙力・文章力・コミュニケーション力、そして想像力がアップすると読書がもたらすメリットがいくつも紹介されている。なかには、人生の謎を解く鍵は本の中にある！という見出しもある。

私は村上春樹という作家が好きで、「1Q84」、「ノルウェーの森」、「海辺のカフカ」等、ほぼすべての作品を読んでいる。彼の作品の魅力は、平易な文章と難解な物語、そしてインテリジェンスに富みオシャレな文脈にあると思っている。ずいぶん前になるが、ある雑誌の作家紹介で村上春樹のことを知った。早稲田大学在学中にジャズ喫茶&ジャズバーを開業し、ある日、神宮球場の外野席でビールを飲みながらヤクルト対広島を観戦しているときに、小説を書くことを思い立ったと記載されており、すごく人としての興味を持ち読み始めたのがきっかけだったと記憶している。確かに彼の作品を読んでいるときは、物語の中に入り込み、いろんな情景を思い浮かべて想像力が高まっているし、リラックスした精神状態でストレス解消になっており、そういう意味では、ビブリオセラピー（読書療法）となっている。そして、村上春樹は毎年ノーベル文学賞の有力候補として話題となっており、彼の作品がワールドワイドで親しまれていることは日本人として誇りである。

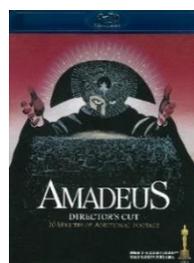
さて、読書の効果について話を戻すが、そのエビデンスは？と、図書館のホームページで電子ジャーナルを利用して検索してみた。臨床生理学を専門としているので、読書、脳波、心拍変動をキーワードとして検索すると、いくつもの原著論文、総説がピックアップされた。邦文しか検索しなかったが、PubMedでの検索や、キーワードを増やすと限りなくピックアップされると思われた。タイトルから興味深い抄録を読み、さらに関心が持てるものはフルペーパーで読んでみた。読書による効果を医学的なツールを利用して検証しており、非常に興味深い研究もあり、卒論研究のテーマ、あるいは毎年行っている読書感想文と関連付けて学部を超えた共同研究ができるかなど、文献検索から勝手にどんどんと想像力が高まって時間が経つのを忘れた。

このように、読書の効果は言い換えれば「図書館の利用効果」であり、学生時代に大いに図書館を有効利用して「読書効果」を実感して欲しい。

◆◆ 天才と凡庸—映画『アマデウス』をめぐって— ◆◆

経済経営学部教授

松本 和彦



1823年11月、冬の凍て付くような寒い夜。雪が吹き荒ぶなか二人の男がある老人の家を訪れる。その老人は意味不明の言葉を繰り返して叫ぶ。「モーツァルト。」「モーツァルト。」「告白する。私は君を殺した。」「モーツァルト、君を殺した。赦してくれ。」「どうか慈悲を。君を殺した私を赦してくれ。」この老人はウィーン宮廷音楽師、アントニオ・サリエリ（1750-1825）である。これは、ミロス・フォアマン監督、ピーター・シェファー脚本によるアカデミー賞8部門を受賞した名作『アマデウス』（1984年作品）の冒頭のシーンである。この映画は「モーツァルト毒殺説」の噂をめぐって18世紀音楽の都ウィーンを舞台に展開される。この物語はサリエリの回想録とも言える。

「神はモーツァルトを殺し、私に責め苦を与えた。」「32年間私は苦しみ抜いてきた。」「自分の存在が薄れていき、私の音楽も忘れられていく。今ではもう演奏もされない。」「あんたも同じだよ。この世の凡庸なる者の一人。私はその頂上に立つ凡庸なる者の守り神だ。」これは、サリエリが自室で自殺を図って数週間後、病室で病院付き神父フォグラーター師に語った言葉である。この告白のあと朝食をとるため車椅子に乗せられて、患者で溢れかえっている廊下を通りながら、老人は言う。

「凡庸なる人々よ。」「罪を赦そう。」

これが、サリエリがスクリーン一面に映し出され、両手を広げて宙に向かって語りかける最後のシーンである。

言うまでもなく、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756–1791）は音楽史上、不滅の光彩を放つ不世出の天才である。他方サリエリは、かつてはウィーンでその名をもっとも知られた宮廷音楽家であったが、モーツァルトの陰に見え隠れする存在でしかなかった。フルートとハーブの協奏曲、2台のピアノのための協奏曲など、その譜面がまったく加筆・訂正されていないのを見て、ショックに打ちのめされるサリエリの姿がそのことを物語っている。モーツァルトに対する愛と嫉妬、そして神に対する不信と復讐に苛まれた生涯であった。天才と凡庸との対比がみごとに浮かび上がってくる。

私がこの映画を観たのは20代半ばであったが、最も印象深かったのはサリエリによって最後に発せられた独り言である。
「凡庸なる人々よ。」

というのも、この言葉は自分に向かって言われているようで愕然としたからである。音楽家で言えばモーツァルト、哲学者で言えばルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（デレク・ジャーマン監督、映画『ウィトゲンシュタイン』1993年作品）、数学者で言えばジョン・ナッシュ（ロン・ハワード監督、映画『ビューティフル・マインド』2001年作品）など天才と呼ばれる人はきわめて稀な存在である。われわれ凡庸なる人々は、もしあるとすれば、自分に与えられた才能を開発すべく地道に日々努力するしかないのではないかと私は思わざるをえなかった。

大学生活に入った者、つまり本来的に学問を志している者にとっては、若い時には学問は自分の意志によって無限に開かれているように思われる。真理を独力で探究することに情熱を傾けるものだ。

当時、私は真理を発見するためには学問にどのように取り組むべきかという、その方法論に強い関心を抱いていた。最初に読んだのはデカルトの『方法序説』（1637年）であった。デカルトは第一部冒頭で次のように述べている。

「良識（ボン サンス bon sens）はこの世のものでもっとも公平に配分されている。なぜというに、だれにしてもこれを十分にそなえているつもりであるし、ひどく気むずかしく、他のいかなる事にも満足せぬ人々さえ、すでに持っている以上にはこれを持つと思わぬのが一般である。このことで人々がみなまちがっているというのはほんとうらしくない。このことはかえって適切にも、良識あるいは理性（レゾン raison）とよばれ、真実と虚偽とを見わけて正しく判断する力が、人々すべて生まれながら平等であることを証明する。……そもそも良き精神を持つだけではまだ不完全であって、良き精神を正しく働かせることが大切である。きわめて偉大な人々には最大の不徳をも最大の徳と全く同様にいう力がある。また、ごくゆっくりでなければ歩かぬ人でも、つねに正しい道をたどるならば、駆けあぐる人や正しい道から遠ざかる人よりも、はるかによく前進しうるのである。」（『方法序説』改版、落合太郎訳、岩波文庫、1967年、12頁。）

私はこの文章に衝撃を受けた。と同時に、私にも良識ないし理性が潜在的であれ配分されていると信じ、勇気づけられた。それでは、真実と虚偽とを識別し正しく判断する力を働かすためにはどのようにすればよいのか。

それ以後、私はひとりの学問探求者として、ベーコン『ノヴム・オルガヌム（新機関）』（1620年）、『学問の進歩』（1605年）、デカルト『哲学原理』（1644年）、『精神指導の規則』（1701年）、『省察』（1641年）、スピノザ『知性改善論』（1709年）、ロック『人間知性論』（1690年）、『知性の正しい導き方』（1706年）、ヴィーコ『学問の方法』（1709年）、カント『プロレゴメナ』（1783年）、フィヒテ『学者の使命に関する数講』（1794年）、『学者の本質と自由の領域におけるその現象とについて』（1806年）、『学者の使命に関する五講』（1811年）、シェリング『学問論』（1803年）、ポアンカレ『科学と仮説』（1902年）、『科学と方法』（1908年）などを読んで考えあぐねていた。読めば読むほど迷いは深まるばかりであった。しかし、考えては迷い、迷っては考えるという思考のプロセスだけは学び得たように思う。

私は自分の硬直化した思考が修正・変更されるたびに驚きと喜びを覚えた。また、方法論そのものに固執するのではなく、対象を伴ったひとつの学問領域自体に専念することの重要性も再認識した。方法論そのものだけでは学問は進歩しえないからである。まずわれわれは個別学問そのものの研究に専心するとともに、学問上の遺産である古典的著作を繙き、それを踏まえたうえで現在案出されているさまざまな方法論の適否を点検すべきではなからうか。学問に王道はないのである。

しかしながら、残酷にも時が経つとともに道が閉ざされ、自分がいかに凡庸であるかを思い知らされることになるのが通例である。また、後になって模倣者（エピゴーネン）であるより凡庸のほうがまだましではないのか、と思えるようになる。ヴィーコは興味深い例を挙げている。ティツィアーノは、フランシスコ・バルガスに「なぜそんなに筆の毛の跡がはっきりと見えるほどごつてりと塗りたくった描き方をするのか」と尋ねられて答えている。

「人は誰でも自分の従事している芸術において卓抜であるとの賛辞を何にせよ獲得するよう目指さねばなりません。そして模倣者である

との評価を下されることは凡庸と言われるよりも悪いことです。そこで、ミケランジェロとラッファエッロが、前者は雄渾な描き方において、後者は繊細な描き方において、それぞれ最高の地位を占めてしまっていますので、何らかの名声を手に入れるためには彼らとはできるかぎり別の道をとる必要があるのです。」(『学問の方法』上村 忠男・佐々木 力訳、岩波文庫、1987年、131 - 132頁。)

ところで、ひとつの著作に学問的に感動したことがあるだろうか。私は京都大学教授であった加藤新平先生の『法哲学概論』(有斐閣、1976年)に学生時代はじめて接したときに深く感激した。その思索の深さ、緻密さ、そしてときにみられる、隠そうとしない論述の迷いに心を打たれた。この著作は今の私にとっても畏敬の念を禁じ得ない著作である。

また、学問の成果は誰が正当に評価することができるのであろうか。一般的に言って同業者、つまり学者ないし学者共同体ではなかろうか。学者はその学問の素養が欠如している者の判定を信用しないし、気に留めないであろう。カントは『諸学部争い』(1798年)序論の冒頭で次のように述べているが、この主張は現在でも妥当すると思う。

「学識の全総体(本来これは学識に献身する人たちの頭脳のことである)を、いわば立場のようなやり方で分業によって取り扱うというのは、最初にその考え方を抱き、それを公に実行するよう提案した人の、悪くはない着想であった。そのようにすれば、学問の専門分野の数だけ公の教師が、すなわち教授が、学問の受託者として任用されることになり、かれらは一緒にあって、大学(あるいはまた上級学校)と呼ばれる、自治権をもった(というも、学者としての学者について判断できるのは学者だけだからである)一種の学者公共体を形成することになるであろう。そこで大学は、学部(大学の学者は学識の主要な分野に分属するが、その分野の違いに応じて区分される小団体)を介して、下の学校から大学へ進もうとする生徒に入学を許す権限をもつ一方、博士と呼ばれる(大学の構成員ではないという意味で)自由な教師に、あらかじめ試験を行ったうえで、誰からも承認された地位をみずからの権威にもとづいてあたえる(位階を授与する)権限、すなわちかれらを任命する権限をもつことになるであろう。」(『カント全集18』角 忍・竹山 重光訳、岩波書店、2002年、24頁。)

カントは、学者としての学者について判断できるのは学者だけである、とはっきりと述べている。また、学者は権力を求めるべきではない。ましてやそれにしがみつくと醜行である。そうではなくて、学問上の権威を求めるべきである。カントが主張していることは今でも正当である、と私は思う。カントは『永遠平和のために』(1795年)のなかで、理性の自由な判断をその本質とする哲学者が権力の掌握を求めるべきではないと述べている。

「国王が哲学をし、あるいは哲学者が国王になるというようなことは、待望されるべきことではなく、また願われるべきことでもない。その理由は権力の所有は、理性の自由な判断を必ずそこなうことになるからである。」(『カント全集14』遠山義孝訳、岩波書店、2000年、290頁。)

青年が大学生活をはじめるといふことは、学問の世界に足を踏み入れることを意味する。学生時代に自分が師として仰ぐべき学者ないし目指すべき著作と出会うことは重要である。卒業研究や卒業論文を執筆するに際して、学問以外のことに惑わされず、その成果を学者ないし学者共同体に評価してもらえるように心がけることも必要ではなかろうか。

◆◆ 寄 贈 図 書 ◆◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

自著の寄贈	寄贈者
『王充思想研究』	計2冊 笠原 祥士郎 (国際交流センター長・教授、 留学生別科長)
書 名	寄贈者
『おれは一万石』他	計55冊 泉 洋成 (理事)
『金原博の「金言」対談』	三浦 雅一 (理事・薬学部教授)
『木漏れ日に泳ぐ魚』	南野 茂 (理事・事務局長)
『ブルボンの封印』他	計28冊 松本 明子 (薬学学務課長)
『健康・医療心理学入門』	後藤 和史 (国際コミュニケーション学部准教授)
『情報ネットワーク・ローレビュー 第15巻』他	計4冊 佃 貴弘 (経済経営学部講師)

本学名誉教授の宮田一郎先生より中国語の辞典等、計14冊ご寄贈いただきました。

北陸大学図書館報 NO.49 令和2年11月30日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：lib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<https://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library/>